私の卓球人生

十五期　遠藤　孝子

昭和 30 年代の日本は今のように豊かではなく、私が入学した杉並区の中学校には体育館はありませんでした。でも廊下には卓球台が数台立てかけてあり、卓球部が活動していました。当時の練習はまず教室の机を廊下に出し、卓球台の脚をボルトで台に止める作業から始めなくてはなりませんでした。それでも面倒だと思ったことはなく、とにかくボールを打つのが楽しくてたまらないという状況でした。

そんな中、顧問の永井先生が世界選手権日本代表の壮行試合の観戦に連れていってくださいました。東京体育館のかなり上の観客席からではありましたが、日本を代表する一流選手の迫力あるプレーは初心者であった私の脳裏に焼き付きました。

当時高校進学については姉が通学していた商業高校が就職のためにはいいだろうと漫然と考えていましたが、その永井先生の一言「お前は西高に行け」で私の進路は決定。今のように高校見学も一般的ではなかった時代、見学に行くこともなく進学しました。

西高卓球部では体育館の半分をバスケットボール部や剣道部が使用していて、ボールの音がほとんど聞こえない中での練習でしたが、女子部員が少なかったこともあって、先輩たちがよく練習してくださいました。インターハイ予選や都立大会などにも参加しましたが、都立大会の団体戦での優勝（？）以外これといった成績も残すこともなく、高二の秋には引退。当時どこの部もこの時期から受験勉強に入るのが一般的でしたから、何の疑問も持たず、卓球から離れても特にストレスを感じることなく勉強の日々を過ごしました。優秀な仲間とともに、今思えばこの時期がいちばん勉強しましたし、その後の自分の礎になったと思います。

そして大学入試の最終日、受験勉強から解放された気分になって早大構内を出たところ、体育館からボールの音が聞こえたような気がして足を止めました。そこに卓球部女子選手と当時コーチの森武先生が出ていらして、私は大学卓球部がどういうところか何もわからぬまま合格発表の翌日から体育館に通うことになったのです。

早稲田大学での毎日の中で、練習や大会での思い出は数多くありますが、夏休みに森先生の助手として新宿区夏休み小学生卓球教室のお手伝いをさせてもらったことは忘れられません。各小学校から、午前、午後各一〇〇余名が三日間、次の班はその後の三日間やってきました。ほとんど卓球経験のない子供たちが、最後はラリーや試合を楽しめるようになるのです。子供たちがかわいくて私たちも時を忘れるほどでした。企画した方や学校関係者も素晴らしかったのですが、なんといっても森先生の指導と子供たちの笑顔が強く私の心に刻まれた時でした。このことも今の活動の原点になっています。

もう一つ、私の今につながる荻村伊智朗さんとの出会いがあります。当時世界チャンピオンの座についた荻村さんが、進学した西高のＯＢであることは全く知りませんでした。十月の記念祭に荻村さんが来校されることになり、全校放送が流され、体育館にたくさんの生徒が集合、荻村さんの

華麗なるプレーを目の当たりにしました。その時は卓球部の一員として観戦し、全体でお話を伺うだけでしたが、早大入学後は関東学生一、二部リーグの大学で卓球を続けている西高卒業生が私以外にいなかったこともあって、全日本学生卓球選手権大会の際などには「どう？元気にやってる？」などと声をかけてくださり、雲の上のような存在であった方が、多少なりとも気にかけてくださっているということだけで大きな励みになりました。

その後、西高卓球部ＯＢのオーバーフォーティーの会に参加するようになってからは、親しくお話しする機会も増え、荻村さんと試合を楽しんだこともありました。最初私はお楽しみ試合のつもりでボールを打っていましたし、たかが私ごときものに荻村さんが本気で打球してくるとは思いませんでした。ところが荻村さんの鋭い眼差しと戦術、一球も気を抜くことのないプレーに圧倒されました。私は荻村さんのカットをミドルに強打して得点できるシーンもあったのですが。

当時荻村さんは世界卓球連盟会長として多忙を極める中でも、西高ＯＢとのつながりを大切にされ、ＯＢ会では全世界で卓球の普及と発展を図りスポーツでの国際交流をという熱い思いを語られました。日中国交回復前の日中卓球交歓会の開催やピンポン外交で知られる米中の国交樹立、一九九一年世界選手権幕張大会での韓国と北朝鮮の統一コリアチームの実現など卓球を通じで世界の平和に尽力され、幅広く活躍されていました。志半ばで多くの方に惜しまれ逝去されましたが、荻村さんの世界観、卓球に対する姿勢を強く意識した時でした。

そして、長年調布市卓球連盟会長を務め、地域の卓球の普及発展、振興を目標に活動している、夫・遠藤洋には創立当初からスポ少活動も支えてもらっています。余談ですが、若いころの遠藤は荻村さんに似ているとよく言われました。

一九八〇年に調布市へ転居をきっかけに、全国組織のあるスポーツ少年団として一九八二年四月つつじヶ丘スポーツ少年団の活動を開始しました。

そのころは今のように数多くの大会はありませんでしたが、全国スポーツ少年団大会や全国ホープス卓球大会や全日本卓球選手権ホープスの部、カデットの部に東京代表として出場できるようになるなど、次第に大会成績も残せるようになってきました。

地域の大会から東京の大会に参加するようになって　西高卓球部ＯＢ会会長の田中先生が長年東京都卓球連盟の役員をされていることを知りました。それからは大会のたびにお会いし、いろいろお話を伺うことができ、励ましをいただき今日に至ります。

当時、会社勤めをしていた私は通勤電車の中で立ったまま居眠りすることもありましたが、それでも練習や大会の引率を休むことはほとんどなかったのも子供たちの元気な姿に接し、こちらが元気をもらってきたからでしょう。仕事上のごたごたや社内の勢力争いに嫌気がさし、少なからぬ屈辱も味わい定年前に退職しました。しばらくは気持ちの整理もつかずにいましたが、そんな中でも卓球に関わっていたことで気持ちの切り替えができたのだと思います。

近年は小中学生といえどもトップを目指すには、合理的で、しかもできるだけ近道を探そうという風潮になってきており、小中学生の卓球環境も大きく変化してきています。自分の練習場があり、豊富な練習量を誇るクラブや個人コーチの元で力をつけている選手などに、追い付けないのではと思うことも正直あります。

スポーツ少年団は、スポーツを通じて健康な体と心を養い、立派な人間になる、スポーツを通じて友情と協力を学ぶ等々という理念があり、そのスタンスは創立当初の三十数年前と変わっていませんが、広い視野とたくさんの情報を取捨選択する能力、見極め、分析できる能力、そして行動に移す能力が求められ、時代とともに今後の歩む道を模索しなくてはならないかもと思うこともあります。

そんな中でも、卓球を始めたい、中学の部活で指導者がいない、強いメンバーがいるらしいと聞いた、などと言って当団を訪ねてくる人がおり、毎年減ることはありません。入会してくる人の動機は様々ですが、それぞれ目標が違ってもそれに向かって小学生から高校生のメンバーが一緒に卓球を楽しみ、切磋琢磨し、お互いの成長を喜び、私たち大人もその活動を支援していくこのチームを誇りに思うとともに、少なくとも地域に根差した底辺拡大には貢献しているかなと自負しています。また、当団卒業生には故郷のような存在になっているようで、よく訪ねてきてくれます。一見勝利至上主義の対極にあるように見受けられますが、勝利をあきらめたわけではなく、それぞれの目標に向かって活動し、日々の活動の中から得るものがあって成長してくれればと思っています。当団卒業後、高校、大学、実業団等で活躍している人もおり、指導者として活動している人もいて、それぞれの人生の中でこの活動が生きて行ってくれればと思っています。

この活動を荻村さんの精神が受け継がれているといってくださった西高ＯＢがいました。来る者拒まず、数々の出会いを大切に、与えられた環境で最善を尽くす、等々知らず知らずのうちに受け継いできたのかもしれません。

日々の生活に忙しく、自分を振り返る時間もないまま過ごしてきましたが、西高卓球部七十周年に際して原稿を書く機会をいただき、感謝しています

考えてみれば選手時代以上の人生の半分近くをこの活動とともに歩んできました。今更ながらですが、西高での三年間、早稲田大学での四年間、その後の何十年、普通に大学に通い、会社に勤め、家事や育児をしていたら到底出会えない人たち、その方々との出会いがあり、力添えがあって今の自分があるということを改めて感じています。

これまでご支援、ご協力いただきました方々に感謝しつつ、これからも出会いを大切にしながら歩んでいきたいと思っています。

つつじヶ丘スポーツ少年団
祝 創立30周年記念大会祝賀会